Preview

兵庫県政150周年記念事業

横尾忠則　画家の肖像

2018年5月26日〈土〉–8月26日〈日〉

休館日：月曜日［ただし7/16〈月・祝〉は開館、7/17〈火〉は休館］

観覧料
一般700（550）円、大学生550（400）円、70歳以上350（250）円、高校生以下無料
※（　）内は20名以上の団体および前売料金
※障がいのある方（70歳以上除く）は各観覧料金の半額、その介護の方（1名）は無料

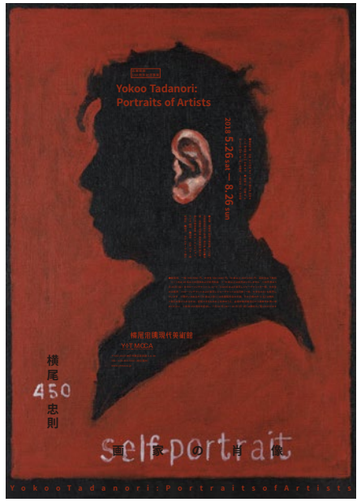
1965年の自主制作ポスター《TADANORI YOKOO》以来、横尾さんは作品にたびたび自身の姿を登場させています。1960年代後半から若者文化を牽引し、作品のみならず作家自身のイメージまでもがメディアによって拡散されてきた横尾さんにとって、主観と客観が混在する自身の肖像は特別なテーマであったといえます。また、グラフィックデザイナーから画家へ転身する1980年初頭には、確立したデザイン手法を封印し、絵画の中に自分らしさを求めて、多種多様な自画像を描き始めます。

本展の第一部では、移り変わる関心のままに主題や様式を変化させてきた横尾さんの根底にある自己探求のプロセスを、自画像というテーマから探ります。虚像としての横尾忠則像を自ら複製する1960年代後半から70年代、試行錯誤を繰り返し、様々な手法で自身の姿をモチーフとして取り入れる1980年代、少年期の記憶から自身を見つめる1990年代、日常の延長をスナップ写真のように描きとめる近作など、自画像の変遷は、描くこと、生きることに対する横尾さんの意識の変化でもあります。

第二部では、横尾さんが影響を受けた画家の肖像や模写作品を展示します。そこには師であり仲間でもある先人たちへの敬意や共感、批評等、様々な思いが見え隠れしています。

自己と他の画家との間を往還する「画家の肖像」が、変幻自在の画家、横尾忠則の道程を辿る機会となれば幸いです。

平林 恵｜本館学芸員



横尾さんデザインの展覧会ポスター
2015年に描かれた自画像がもとになっています

【関連イベント】

イブニング・ギャラリー・ツアー
講師：当館学芸員
日時：6月2日〈土〉、7月14日〈土〉、8月11日〈土〉 いずれも18:00–18:45
集合場所：当館オープンスタジオ
参加費：無料、ただし要展覧会チケット
※当日は20:00まで「ぱんだかふぇ」を営業します

その他、コンサートやワークショップなどのイベントを開催予定です。
各イベントの詳細は当館HPなどでご確認ください。

兵庫県立美術館｜展覧会スケジュール

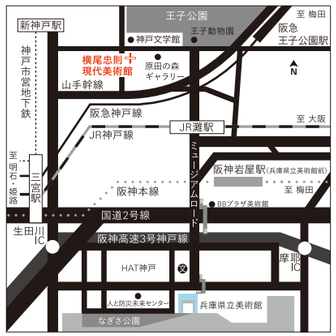
特別展

日本スペイン外交関係樹立150周年記念
兵庫県政150周年記念事業
「プラド美術館展　ベラスケスと絵画の栄光」
2018年6月13日〈水〉–10月14日〈日〉

県美プレミアム

「美術の中のかたち―手で見る造形　中ハシ克シゲ展（仮題）」
「県政150周年記念　ひょうご近代150年（仮題）」
2018年7月7日（土）–11月4日（日）

※兵庫県立美術館の特別展又は県美プレミアムの有料チケット半券ご提示で、
当館の企画展を団体割引料金でご覧いただけます（詳細はHPなどでご確認ください）



開館時間
10:00–18:00
（展覧会開催中の金・土曜日は
10:00–20:00）
※入場は閉館の30分前まで
休館日
月曜日（祝日の場合は翌日）
年末年始　メンテナンス休館

facebook
twitter

Y+Tメールマガジン登録
www.ytmoca.jp/news/index.html

Y+T MOCA
〒657–0837 兵庫県神戸市灘区原田通3-8-30
Tel: 078-855-5607（総合案内） Fax: 078-806-3888
www.ytmoca.jp

編集後記
学芸員コラムでもご紹介しましたが、今年度は、まだ公開されていないものも含め、
国内外で横尾さんの作品展示が目白押しです。一方、当館でも次々と野心的な展覧会が続きます。
ご期待下さい。（多胡）

横尾忠則現代美術館ニュース Vol.18
2018年5月24日発行
編集・発行：横尾忠則現代美術館
印刷：岡村印刷工業株式会社

the Y+T Times

横尾忠則現代美術館ニュース

Yokoo Tadanori Museum of Contemporary Art *NEWS LETTER*

Special Report 横尾忠則の冥土旅行

Event Report
01 ワークショップ
「〇〇の女―ヨコオ流・仮面変身術」
02 インスタグラマー向け「横尾忠則の冥土旅行」
無料招待会

Column
01 横尾さんの作品展示予定について
02 新収蔵作品紹介
03 インターンシップ & 博物館実習

Topics
最近の横尾さん

Editors' Choice
01 アーカイブルーム
02 MUSEUM SHOP

Preview
横尾忠則　画家の肖像

Information
次回展関連イベント
兵庫県立美術館 展覧会スケジュール

18
2018.5.24

壁一面の「赤」の絵画

Journey to the Next World

兵庫県政150周年記念事業　開館5周年記念展

横尾忠則の冥土旅行

「横尾忠則の冥土旅行」は、冥土という言葉が示すとおり、死の向こう側に広がる“死後の世界”をテーマとした展覧会です。死とは、誰もが等しく経験するにも関わらず、誰もその正体を知らない謎に満ちた存在です。自分は死んだらどこへ行くのか? 亡くなった家族や友人はどこへ行ったのか? その様子を知りたい、見てみたいという疑問や願望は、様々な“死後の世界”のイメージを生み出してきました。そうしたイメージには、自らの死後の行き先を知ることで逆に現在の生をどう生きるべきか見つめ直す機能、あるいは身近な他者の死に際して、その死後のゆくえを視覚的に感じ取ることで悲しみを癒し、慰める機能を果たしていたといえます。そうした意味において、死後の世界を旅する「冥土旅行」とは、死者よりもむしろ生者のために用意された旅路、いつか来る死に備えるための“下見旅行”なのです。

横尾さんは自らの作品において、こうした“下見旅行”的アプローチをしばしば行っています。若い頃から死に特別な関心を抱いていた横尾さんは、自身の首吊り姿をポスターに描いたり、新聞の紙面に自分の死亡広告を出したり、初めての作品集に『遺作集』と名付けたり、自ら進んで死の側に飛び込んで行くような行為を何度も行ってきました。それは、恐怖の対象である死を、あえて擬似的に経験することによって乗り越えようとする試みであったと横尾さんは語っています。本展では、横尾作品の根底につねに在り続けるこうした“死”を見つめるまなざしに注目しながら、作品を4つのパートに分けて紹介しました。

巨大なヌード写真に囲まれた空間

後ろ姿を描いた80年代初頭の《Back of Head》シリーズ

2F展示室の中央、八角形の壁に囲われた空間には「神曲」の世界が展開します。ルネサンス文学の傑作・ダンテの『神曲』は主人公ダンテが生きながらにしてあの世へと迷い込み、地獄・煉獄・天国を巡る、まさに「冥土旅行」の物語です。『神曲』は横尾さんの愛読書の一つであり、様々な形で作品に影響を与えています。今回の展示では、この『神曲』のイメージが重ねられた写真――1970年に雑誌『平凡パンチ』の企画で横尾さんが撮影した19人の女性の集団ヌード写真を3.6mの高さまで引き伸ばして、八角形の内壁面を覆うように展示しています。

「神曲」の空間の外には、鮮烈な「赤」の絵画が並びます。横尾さんは1996年頃から、画面全体が真っ赤な色彩に覆われた「赤のシリーズ」と呼ばれる作品群を制作していますが、今回はそれらを中心に、横尾作品に印象的な「赤」の絵画を集め、天井高5.5mの壁面を埋め尽くすように展示しました。そこに広がるのは、不気味な死の気配を漂わせながら、同時に生を暗示するモチーフに満ちた不可思議な世界です。「赤」は、生と死が互いに表裏一体となりながら共存しあう、横尾さんの作品世界を象徴する色なのです。

続く3F展示室では一転、謎めいた女性たちが姿を現します。会場の大半を構成するのは、2017年から今年にかけて制作された横尾さんの最新作のシリーズです。いずれも女性のポートレートを描いていますが、奇妙なことに彼女たちの目元はキャベツや石、本、トイレットペーパーといったオブジェによって唐突に隠されており、その表情を読みとることができません。横尾さんは1980年代にも髪を下ろした女性の後ろ姿を描いたドローイングシリーズ《Back of Head》を制作しており、新作はこうした顔の見えない女性像の系譜に連なるものであるといえるでしょう。“見たい”のに“見えない”女性たちのイメージは、謎に満ちた「死」の姿とも重なります。死という謎が、それゆえに豊かな死後の世界のイメージを生み出してきたのと同様、不可解でミステリアスな女性像は、私たちの想像を様々に掻き立ててくれる存在であるといえます。

新作は今後海外での展示が予定されており、本展がまとまった形で見られる最後の機会となるかもしれません。一方で、横尾さんはすでにこれらのシリーズの新たな展開も見据えておられるようで、今後もどんな作品が生み出されていくのか、まったく目が離せません。

林 優｜本館学芸員

《愛の洞窟》2018年｜作家蔵

《ヒキガエルと女》2017年｜作家蔵

背景のディスプレイはウィリアム・ブレイクによる『神曲』挿絵版画

初公開16点を含む最新作

EVENT REPORT 01

ワークショップ「〇〇の女ーヨコオ流・仮面変身術」

2018年3月24日〈土〉13:30–16:00 | 当館展示室、オープンスタジオ（1F）

紙粘土は触り心地が良くてクセになります

さらに変身したい人はウィッグも被り「〇〇の女」になりきって撮影

特集でもご紹介しましたが、「横尾忠則の冥土旅行」では、横尾さんの最新作である女性のポートレートシリーズを展示しました。《キャベツの女》、《ヒキガエルと女》などと名付けられたこの肖像画でまず目を引くのは、描かれた女性の顔を覆うキャベツや蛙です。目元が見えず表情の読み取れない彼女たちの、ひっそり微笑む口元がよりミステリアスな雰囲気を醸し出しています。

今回のワークショップでは、これらの作品にちなんで、紙粘土で立体のオブジェを作り、それをつけた仮面を被ることで、参加者自身がこの謎めいた人物たちに変身しました。

愛猫タマやトイレットペーパー、敬愛するピカソの作品の一部など、このシリーズでは、横尾さんにとって身近なもので女性の顔が覆われています。それにならい、参加者自身の身近なものを紙粘土で作り、それから土台となる仮面にくっつけていきます。

今回は大人の方の参加が多く、オブジェ作りに皆さん熱中。ディテールや質感にこだわったものや、顔の半分を覆うほどの大作も生まれました。オブジェをくっつけ完成した仮面を被ると、急に妖しい雰囲気が漂います。撮影ブースでは、お互いの力作を見合って盛り上がりながら、自由なポーズで撮影。骨つき肉、オムライス、力士、新幹線などの具体的なものから、時間や音、色など抽象的なものまで、一つ一つ独特の世界観があらわれた肖像写真が仕上がりました。

オープンスタジオの壁面に展示した肖像写真（一部）

多胡真佐子 | 本館学芸員補助

EVENT REPORT 02

インスタグラマー向け「横尾忠則の冥土旅行」無料招待会

2018年3月17日〈土〉18:00–20:00 | 当館展示室、オープンスタジオ（1F）

思い思いに、面白い角度や構図を探りながら撮影する参加者の方々。一目で人を惹き付ける横尾さんの作品を前にすると、撮影にも熱が入ります

InstagramなどのSNSを通じて「横尾忠則の冥土旅行」展を発信していただける方を対象とした、無料招待会を開催しました。前回の展覧会に引き続き、2回目の開催となった本イベント、今回も多数のご応募をいただきました。本展の担当学芸員によるミニレクチャーの後、参加者の方々は自由に展示室を巡り、気になる作品の前で思い思いに撮影を楽しまれていました。

当館に限らず、近年は部分的なものも含め写真撮影可能な展覧会がますます増えていますが、展覧会での写真撮影には、二つのジレンマを感じます。一つは鑑賞体験に関わることで、カメラ無しに、印象に残った作品を目に焼き付けようと細部にまで目をこらす体験とは異なり、カメラ片手に展覧会を見ていると、レンズ越しの作品ばかりを見て、実際の作品に対面していないような気分になることがあります。一方で、写真家のように直感的に気になった対象を撮るという行為は、これも作品の感受の仕方の一つといえるかもしれません。

もう一つは美術館が抱えるジレンマ。SNSでの拡散によって美術館へ足を運ぶきっかけを作りたいという思いと、著作権や作品保護の観点からの制度的な制約とのバランスです。今回の無料招待会では、改めてそのことを検討する機会になりました。展示や鑑賞の形が多様になる中で、作品を鑑賞するとはどういうことか、考えを巡らせながら今後も試行を重ねることが必要です。

多胡真佐子 | 本館学芸員補助

Column 01　横尾さんの作品展示予定について

前号でもお伝えしたとおり、横尾さんの作品は海外で展示される機会も多いのですが、今年は（当館以外にも）国内の展覧会への出品がいくつも予定されています。

まず注目されるのは、戦後美術の大きな転換点となった80年代を回顧する企画展が相次いで開催されることです。ちょうど横尾さんが「画家宣言」を行った時期に当たるので、“画家”横尾忠則としての、最初期の作品が出品される予定です。

「横尾忠則　幻花幻想幻画譚」2015年、当館での展示風景

《暗夜光路　N市-III》（2000年）のモチーフ。西脇市内では、ほかにも作品になったY字路をたくさん見ることができます

ギンザ・グラフィック・ギャラリーでは「横尾忠則　幻花幻想幻画譚」が開催されます。2015年に当館で開催された同名の展覧会とほぼ同じ内容で、瀬戸内寂聴さんの時代小説『幻花』の挿絵原画371点が展示されます。横尾さんのグラフィックワークの最高傑作のひとつ《幻花》全点が東京で公開されるのは初めてです。

最後にご紹介するのは、当館の大先輩にあたる西脇市岡之山美術館での個展。同館で横尾さんの個展が開催されるのは約5年ぶりです。横尾さんの故郷である西脇には、美術館のほかにも「Y字路」のモチーフとなった街並みなど、ファン垂涎のスポットが満載です。この機会に、当館と西脇とをあわせて訪ねてみてはいかがでしょうか…？

「起点としての80年代」
2018年7月7日〈土〉–10月21日〈日〉 金沢21世紀美術館
2018年11月3日〈土・祝〉–12月16日〈日〉 高松市美術館
2019年1月5日〈土〉–3月24日〈日〉 静岡市美術館

「1980年代　日本の現代美術」
2018年11月3日〈土・祝〉–2019年1月20日〈日〉 国立国際美術館

「横尾忠則　幻花幻想幻画譚」
2018年9月5日〈水〉–10月20日〈土〉
ギンザ・グラフィック・ギャラリー

「横尾忠則展」
2018年9月–2019年3月　西脇市岡之山美術館

※展覧会名、会期は変更される場合があります。
詳しくは各館にお問い合わせください

山本淳夫 | 本館学芸課長

Column 02　新収蔵作品紹介

《風景No.9 黄色い女》1969年

《風景No.9 黄色い女》1969年

昨年度の「横尾忠則 HANGA JUNGLE」展をきっかけに、130点もの版画作品が当館に寄贈されました。すでに2013年度に69点の版画を受贈しているので、合計199点の版画が当館のコレクションとなりました。これまで横尾さんが制作した版画の総数は200点強なので、ほぼそのすべてを収蔵したことになります。

新収蔵作品のなかから、今回は《風景No.9 黄色い女》をご紹介します。この当時、横尾さんの肩書きはグラフィックデザイナーでしたが、本職の画家や版画家顔負けの大胆な版画で注目を集めていました。この作品も、版を刷った透明なアクリルシートを何枚も重ね合わせるという特種な技法でつくられています。印刷物の制作工程における色分解に着目した、デザイナーならではの発想で、微妙にシートがずれる効果も計算されています。

モデルになった女性は、横尾さんが建築デザインを手がけた大阪万博（1970年）せんい館イメージモデルの「アコ」です。約300名の応募者の中から選ばれた、当時20歳の彼女を主人公に、映像作家の松本俊夫さんが映像作品《スペース・プロジェクション「アコ」》を制作しました。映像はドーム内の四方に設置されたスクリーンのほか、「アコ」の身体をかたどった多数のレリーフにも映し出されたそうです。近年流行のプロジェクション・マッピングを先取りするような作品だったといえるでしょう。

《風景No.9 黄色い女》は、横尾さんの貴重な初期の版画を代表する1点であるとともに、映像や音響などのコラボレーションによる当時のマルチメディア・アートとも関連する、たいへん興味深い作品だといえます。

横尾さんが建築デザインを手がけた大阪万博せんい館（1970年）

山本淳夫 | 本館学芸課長

Column 03　インターンシップ ＆ 博物館実習

緊張した面持ちの初日ガイダンス

毎年恒例となりました、神戸芸術工科大学のインターンシップと甲南大学及び武蔵野美術大学の博物館実習。2017年度はインターン生5名と実習生9名の参加です。今回は期間中に展覧会の展示替えがあったため、これまで以上に、通常は目にすることのない美術館の裏側の仕事に携わる場面が多くありました。

例えば、展覧会開催に際し作品・資料の移動が生じますが、安全を確保するため、使用する物品や空間などの整備（清掃）をしなくてはなりません。そして、作品・資料の状態を記録・管理するため、「調書」「コンディションノート」などと呼ばれる書類を使用します。館内環境の整備や調書の整理作業より、作品・資料を保存したり展示したりするためには、たくさんの細やかな業務が必要なことを知っていただけたのではないでしょうか。

もちろん、展覧会開催中にもインターン生・実習生は大活躍です。ワークショップ「観光ペナントをつくろう」では当日対応以外に、試作品をつくるなどの事前準備や終了後の参加者作品の展示作業に挑戦しました。どのような制作手順にしたら参加者に伝わりやすいのか、作品をどのように配置したらより効果的な展示となるのか、美術館スタッフと共に取り組みました。

博物館学芸員資格修得を目指している皆さんが、より美術館への理解を深め、その成果をお客様にも還元できるよう、美術館スタッフも試行錯誤しながらインターン生・実習生の活動を受け入れています。

ワークショップ参加者作品の展示作業

奥野雅子 | 本館学芸員補助

Editors' Choice 01　アーカイブルーム

筒井康隆・横尾忠則『美藝公』（1981、文藝春秋）

筒井康隆・横尾忠則『美藝公』挿絵「女性の輝き」原稿類一式

展覧会「横尾忠則の冥土旅行」で紹介された横尾さんの女性のポートレートシリーズの中には、映画のイメージを用いたものが含まれます。映画からの引用は、横尾さんの他作品にもしばしばみられる手法です。横尾忠則『画集・絵画の中の映画』（1992、ビクター音楽産業）のあとがきでは、「ぼくが映画をテーマにした作品を好んで描くのは、映画がいわゆる物質的現実ではないからである。」と述べられています。

そんな横尾さんの映画への興味が存分に発揮された作品のひとつが、映画産業を題材とした筒井康隆さんの小説『美藝公』。横尾さんが制作した数々の“架空の”映画ポスターが挿絵となっている、二人のコラボレーション作品です。挿絵は本物の俳優さんにポーズをとってもらった写真をもとにつくられ、あたかも実在する映画ポスターのようです。アーカイブルームで保管している『美藝公』に関する原画や色指定紙、刷り出し、素材写真などからは、横尾さんの精緻な制作の様子がうかがえます。

『新装復刻版　美藝公』（1995、ミリオン出版）は開架図書コーナーで自由にご覧いただけますので、ぜひお手に取ってみてください。

奥野雅子 | 本館学芸員補助

Topics　最近の横尾さん

『妻よ薔薇のように　家族はつらいよⅢ』

横尾さんがポスターとオープニングタイトルを手がけた山田洋次監督の映画『妻よ薔薇のように　家族はつらいよⅢ』が5月25日に公開。『東京家族』（2013年）から4回目となる山田監督作品とのコラボレーションです。今回のポスターは映画のための描き下ろし。花瓶に生けられた8本の薔薇の花の中に、家族を演じた8人の出演者の顔が覗いています。

オープニングタイトルも横尾さん描き下ろしの絵画が背景になっているとか。ぜひ劇場でご確認ください。

『妻よ薔薇のように　家族はつらいよⅢ』ポスター

山田詠美『つみびと』挿絵

日本経済新聞夕刊で3月26日から連載されている山田詠美さんの小説『つみびと』の挿絵を横尾さんが担当しています。毎日異なる印象の挿絵に、驚く方も多いのではないでしょうか。実は、小説の内容に合わせて横尾さんが過去の自作の一部を切り取るというユニークな手法で作られた挿絵なのです。オリジナルの作品を想像してみたり、おなじみの作品に新たな視点を発見したり、「読む」と「見る」の新しい楽しみ方を提案してくれています。

『いだてん〜東京オリムピック噺〜』

NHKの2019年大河ドラマ『いだてん〜東京オリムピック噺〜』の番組タイトルの題字を横尾さんが担当します。実在の人物をモデルにした宮藤官九郎さんのオリジナル脚本で、2019年1月放映開始です。

上海当代芸術博物館に出品中

中国初の公営の現代美術の美術館、上海当代芸術博物館（Power Station of Art）で開催中の展覧会「カルティエ現代美術財団: A Beautiful Elsewhere」に横尾さんの作品が展示されています。この展覧会はパリにあるカルティエ現代美術財団のコレクションから約300点を紹介するもので、横尾さんの作品は、当財団に縁のある作家100名以上の肖像画。昨年、ソウルで開催された当財団コレクション展に続いての出品です。7月29日まで開催中。

平林 恵 | 本館学芸員

Editors' Choice 02　MUSEUM SHOP

喜歌劇こうもり、イベット・ジローなどのポスター、『書を捨てよ、町へ出よう』の装幀など、横尾さんが1960年代に制作したポスターや装幀・挿画のイラストレーションをモチーフにした商品が多数入荷しました。文房具や手鏡、ハンカチ、スマホケース、バンダナなどはどれも、ひとつ取り入れるだけでいつもの気分が変わりそうなインパクトがあります。

豊富なバリエーション

当館オリジナルなのでお土産にも最適です

もう一つのおすすめは、昨年末に入荷したポストカードセットです。当館で開催する展覧会のポスターは全て横尾さん自らデザインを手がけています。開館告知から「横尾忠則 HANGA JUNGLE」展まで、これまで開催した18のポスターデザインを網羅したポストカードをセットにして販売しています。それぞれのポスターも取り扱っていますので、ぜひ当館ミュージアムショップにてご覧ください。

多胡真佐子 | 本館学芸員補助